

2. 家庭訪問支援の対象となる若者の状況

学習のポイント

家庭訪問支援の対象となる若者は、おおむね「本人が家から出られない」状況にあるため、家庭訪問支援士はひきこもり状態にある若者と多く出会うことになるでしょう。

家庭訪問支援の対象者と通所型支援の対象者とはさまざまな違いがあります。まずは、その違いを見ていきましょう。

そして、ひきこもり状態にある若者がどんな状況にいるか、思春期・青年期の特性、二次的症狀、家庭環境から、若者の陥っている困難な状態を理解していくようにしましょう。

家庭訪問支援の対象となる若者の状況

本人が外出したり、支援機関に出向くことが難しい場合、本人が支援の必要性を感じているにも関わらず一歩が踏み出せない場合、または本人の動機づけが希薄で支援関係を形成できない場合など、家庭訪問支援の対象となる若者もさまざまなケースが想定されます。

たいていの場合、親や家族、あるいはほかの支援機関など、本人以外から依頼されることによって、家庭訪問支援は開始されるのですが、誰がどのような経緯・理由で支援を希望しているのかをきちんと把握しておく必要があります。なかには、親が「子育てを放棄したい」などという理由で家庭訪問支援を依頼してくる場合もあるので、注意が必要です。

家庭訪問支援の対象となる若者は以下のような状況があると考えられます。

①相談・支援を目的に外出することができなかったり、遠隔地に住んでいるなどの理由で、本人が家

庭訪問支援を望んでいる。親・家族も家庭訪問支援を望んでいる。

②本人は家庭訪問支援を望んでいるが、親・家族は積極的に拒否している。

③主に親・家族が積極的に家庭訪問支援を望んでいる。本人は積極的に拒否してはいない。

④主に親・家族が積極的に家庭訪問支援を望んでいるが、本人は否定的、あるいは強力に拒んでいる。

⑤本人の心身状態や家族状況を鑑みると、早急に家庭訪問支援を行ない、対応・介入する必要がある。本人の能動性、親・家族の能動性にこれだけの違いがあり、それらに従って、支援の緊急度・困難度・専門性も変動します。

実際に対象となる若者のなかには、過去に支援を受けていた人もいます。しかし、今にいたって家庭訪問支援をスタートさせるということは、支援されてなお、状況がほとんど改善されなかったというこ

とです。このことから、本人を含めた親・家族が支援そのものに不信感を持っていたり、一朝一夕にはなかなか解決できない複雑で困難な問題を抱えてい

困難が予想される状況と家族支援の重要性

一般的に、若者本人の年齢が上がるほど、あるいは困難を抱えた状況が長期化している場合ほど、有効な家庭訪問支援を行なうことが難しいとされています。高齢になり、長期化した場合には、支援を求める積極的な動機づけに乏しくなり、自ら問題を解決しようとする能動性をなから放棄したような状態になっていくからです。

また、二次的な問題が起こりやすく、メンタル面でも、強迫症状を誘発したり、暴力行為や自殺企図を伴う場合もあります。

さらに、本人だけでなく、家族機能も弱体化していきます。家族機能が著しく低下した場合には、家族は本人が暴力行為に及ぶことを恐れ、腫れ物に触

たりするケースが存在するということを、家庭訪問支援士は踏まえておかななくてはなりません。

るように接するため、本人が家族を支配するようになってしまうこともあります。家庭訪問支援をしなければならなくなったという時点で、家族機能は低下していると言っているのかもしれませんが。

家庭訪問支援は、家庭訪問支援士と支援対象者のマンツーマンで行なうものにとらえられがちですが、支援対象者である若者の状況だけでなく、家族の状況をきちんと把握し、「本人を含めた家族間を調整する」という意識を持たなければ、適切な家庭訪問支援を行なうことはできません。家庭訪問支援では、家族の協力が重要となりますから、「本人を中心とした家族全体を支援する」くらいの気持ちで支援にのぞむ姿勢が必要です。

図2-2-1 家庭訪問支援と通所型支援の比較

	家庭訪問支援	通所型支援
本人の動機づけ (相談意欲)	△ 支援依頼はたいていの場合、親・家族、ほかの支援機関から。本人の同意を得られたとしても、積極的な動機づけに乏しい。	◎ 本人が能動的に通所することが前提。
困難の度合い	深 「通所できない」ことが前提になる。また、家族機能が低下している場合が多い。	どちらも言えない 利用者にはさまざまなタイプが混在している。
家族の協力	○ 家族と協力関係をしっかり結べるよう、支援側は働きかけるべき。	△ 家族と協力関係は必要だが、本人と支援機関の間で解決することもできる。
相談プロセス	濃 本人と信頼関係を結ぶところからはじめるので、相談プロセスが必然的に濃密になる。	どちらも言えない 本人がグループワークなどの集団行動に入ることができれば、相談プロセスは薄くなる。
本人の負担	大 本人のプライベート空間に入るため、本人の心理的負担が大きくなる場合も多い。	どちらも言えない 「通所する」「仲間に入る」という点で負担はあるが、自身のプライベートは守ることができる。